

（特別寄稿）

「農学ハ舌耕ニアラザルナリ」斎藤萬吉の農村行脚

～ある農業研究者の生きざま～

西 尾 敏 彦

目 次

はじめに

1. 誕生から駒場農学校まで
2. 福島県立農学校教師として
3. 農業経済学をこころざして上京
4. 東京帝国大学助教授・農場主任に就任
5. 農事試験場に移り、農家経済調査に専念
6. 農家・農村の代弁者として

おわりに

はじめに

福島県二本松市に長泉寺という寺がある。開山は少なくとも室町時代にさかのぼるといふこの古刹の本堂向かって左奥に、植樹に囲まれて石碑が建っている。碑の高さは2mほど。わが国における農業経営学の草分けといわれる^{さいとう}斎藤^{まんきち}萬吉の顕彰碑である。

もう10年以上昔になるが、晩秋のある日、この碑を見に、二本松を訪ねたことがある。案内してくださったのは、当時の福島県農業総合センター所長の岡三徳氏。碑銘に刻まれた「農学非舌耕也」の5字をこの目で見たいと思ったか



図1 斎藤萬吉先生碑
（二本松市長泉寺）
岡三徳氏写す

らである。碑文はかなりの字数で、1字1字はあまり大きくはないが、それでもこの6字だけはしっかり目に焼きつけることができた。

鹿児島大西山武一名誉教授によると、「農学非舌耕」は（農学ハ舌耕ニアラザルナリ）と読むという¹⁾。「舌耕」に「こうしゃく」とフリガナしてあるが、わたしには「ぜつこう」と読むほうが実感がわくように思えた。以下は、その「舌耕」の2字を口にした斎藤萬吉とはどんな人か。それを知りたくてたどった、わたしの斎藤萬吉遍歴の記である。

1. 誕生から駒場農学校まで

まず、斎藤萬吉の人となりだが、これについては東京農業大学須々田黎吉教授の詳細な調査報告²⁾がある。以下、それを参考に以下話を進めると…… 斎藤は文久2年（1863）に陸奥国二本松藩士の子として生まれた。幼時に戊辰の役の戦火に遭い、辛酸をなめて育った。明治11年（1878）には駒場農学校農学本科に第2回生^{注1)}として入学。13年には同科を卒業、そのまま新設の農芸化学科に進んだが、翌14年同級生7人とともに退学に処せられてしまった。理由は「怠惰・学業不進歩」だというのが、腑に落ちない。ちょうど駒場農学校の教育路線がそれまでのイギリス農学からドイツ農学へ路線変更された転換期である。彼らはこの過渡期の混乱に巻き込まれたのだろう。

というのも、彼らは講義だけでは飽きたらず、研究誌までつくって研究を競っていたというほど学問熱心な生徒たちである。斎藤のほかに、のちにフェスカ M. Fesca^{注2)}を助けて、わが国初の土性図「甲斐国土性図」の作成に貢献した大内 健^{注3)}まで被処分者に含まれている。一部に不心得者もいたかも知れないが、斎藤や大内までが「怠惰・学業不進歩」とは考えにくい。当時、農商務大輔（次官）であった品川彌二郎があとでこれを聞き、学校の幹部を呼びつけ



図2 農事試験場時代の
斎藤萬吉技師
斎藤萬吉著『農村の開發』より

て叱ったという話も伝わっている。どこかに手違いがあったのだろう。

2. 福島県立農学校教師として

駒場を追われた斎藤だが、明治15年（1882）には郷里に近い郡山の県立農学校（のちに開成山農学校と改名）で助教授の職に就くことができた。ちょうど当時最大の国家事業であった安積開拓の最盛期で、彼の出身藩二本松藩をはじめ会津藩、久留米藩、鳥取藩、松山藩と全国から旧士族が入植、開拓に悪戦苦闘していた時期である。県立農学校は、こうした開拓地の農業に指導者を送るべく創設されたものであった。

県立農学校には駒場で1期先輩の牛村七氏が教授で、同じく農場農夫頭の飯田定一が助教諭でいた。牛村はその後農事試験場に移り陸羽支場長になった斎藤の学友だが、注目したいのは飯田との出会いである。飯田はもともと幕臣で、幕末動乱では彰義隊や五稜郭の戦さにも参加したという。維新後は駒場農学校の農夫となり、老農として有名な船津伝次平に師事したが、明治14年に離職、安積野開拓地牛庭原に松山藩入植者の指南役も兼ねて入植した。その後県勸業課の常雇ともなり農学校で実習を指導したのだが、この飯田との出会いが、斎藤のその後に強く影響したのは間違いない。

農学校（このときは開成山農学校）はしかし制度改革のため4年間で閉鎖され、斎藤は同じ福島県の尋常師範学校に移り、英語と農業教育を受けもつことになった。当時、小学校では農業教育が重視されていて、師範学校でも重要科目であったからだが、このとき飯田もまた同校の教諭補となり農業実習を担当する。駒場農学校では農芸化学科にまで進学した自然科学指向の斎藤青年が、一転して現場の農業に興味をもつようになったのには、この時期の飯田との交流が影響したことは間違いない。飯田を通じて知った安積野開拓地の実情が、彼をより農村に引きつけていったのだろう。

郡山市の開成山公園には、この街の発展の原点となった安積開拓ゆかりの開成館が建っている。県の重要文化財にも指定されるこの建物は開拓の本拠「開拓掛事務所」が置かれたところで、現在はその貴重な歴史を伝える史料展示館だが、なかに開成山農学校の展示もあった。この建物が農学校の校舎として利

用されていたからだが、そのパネルの1枚に「農学校の卒業記念（明治17年）」というのがあって、その前列中央に斎藤萬吉先生が、後列に牛村・飯田両先生が写っていた。同校の卒業記念写真だが、全員が若く和気あいあいとしていて、先生も生徒も見分けがつかない。開成山農学校での師弟関係はいつもこんな雰囲気だったのだろう。

3. 農業経済学をこころざして上京

明治23年（1890）、斎藤は8年を過ごした郡山を去り、ふたたび上京する。「吾ガ学未ダシ」（碑銘）と嘆じての上京である。安積野の農家の窮状を見て、個々の技術より農家経営の建て直しこそが農業の急務と考えたのだろう。

上京した彼はまず独逸学協会学校に通い、ドイツ語と農業経済学を学んだ。当時最高とされたドイツ国民経済学派ゴルツT.F.Von der Goltz^{注4)}らの著書を学習したいと考えたのである。この時代、横井時敬・新渡戸稲造など多くの少壮学者がドイツに留学し、ゴルツの門をたたいている。斎藤もまた自力ではあるが、ゴルツの経済学を身につけようと思ったのだろう。ここで2年間勉学に励んだ。それまでの安定した生活から無一文の苦学生活への転向である。生活費や学費を得るため、早朝から草鞋姿で牛乳配達をつづけたという。

4. 東京帝国大学助教授・農場主任に就任

明治26年（1893）、斎藤は駒場農学校の後身、帝国大学農科大学の助教授に就任する。駒場農学校が東京農林学校に変わり、さらに帝国大学農科大学（明治30年からは東京帝国大学）になって、わずか3年後のことであった。斎藤は乙科^{注5)}（30年からは実科と改称、現在の東京農工大学）で農業経済学を講義するとともに、農場主任・舎監心得として学生の指導に当たった。

ちなみに農場主任の前任は、すでに述べた老農として有名な船津伝次平である。斎藤にも老農的な指導が期待されたのだろう。彼の農場実習は脚絆足袋に編み笠姿で、「常に親^{みづ}から糞桶を担い来^{くわ}稻をとり、もって生徒^{ひき}を率う」（碑銘）というから十分期待に沿うものであったろう。

いっぽう、斎藤の農業経済学の講義だが、須々田³⁾によると、1)経済学の概要、2)農場経済学、3)農政学から構成されていたという。さいわい、その3)農政学の部分であろうか。教え子のノートが原本という彼の著書『農政学』⁴⁾が国立国会図書館デジタル・ライブラリーにあり、容易に閲覧できる。読んでみると、冒頭に「(農政学は) 重に経済学の原理に基づきて国家的農業経済を論ず 特に官府が干渉すべき農事の政策を論究し其一国農事の改良発達を謀り国力を増進するを目的とす」とある。これが彼自身が経済学をこころざした理由でもあったのではないだろうか。

講義は農業と工業との関係からはじまって、農産物、農地、農民の負債及地租、信用制度、関連行政法など多岐にわたる。なかでもとくにページを割いているのが信用制度で、彼が地主・自小作相互補助の信用組合に期待を寄せていたことがわかる。必要に応じ、農事調査のデータや西欧諸国の資料との対比もあり、お仕着せでないナマの農政学をめざした彼の意欲がうかがわれる。随所に現農政への批判がちらつくのは、安積野で8年間を過ごした彼自身の想いが込められていたのだろう。

最後に農学徒の心得として「其事業の起こる処に身を置かねば何事も正当なる解釈は出来ず且自身其局にあらざれば亦問題も起らず故に終に解釈力を失う故に身体を常に邦事上又は町村上に置いて能く其形勢を通観して研究するを要す」と述べている。後述する彼の農家経済調査の原点はここにあるのだろう。

5. 農事試験場に移り、農家経済調査に専念

明治32年(1899)、斎藤は農商務省農事試験場に移る。ときの場長は駒場の同期生沢野淳であった。33年6月には種芸部長に就任、ほぼ4年間(うち1月半は沢野場長死去のため場長心得も兼任)その任にあったが、37年(1904)3月に報告課長に移動した。お役所的に言えば降格だが、彼にとっては念願の農村調査に没頭する自発的な移動であったのだろう。彼の本格的な農村調査はここからはじまった。

ところで今日、斎藤萬吉の名を高からしめている最大のものは、なんといつでもこのとき彼が取り組んだ農家経済調査、世にいう「斎藤萬吉調査」だろう。

わが国農家経済調査の嚆矢といわれ、農商務省農務局が刊行した最初の『農家経済調査 大正10年度』（1924）にも、付録に「故斎藤技師調査及其の続行に依る農家経済状況の変遷調査」が収録されている⁵⁾。斎藤は大正3年（1914）に急逝したが、農商務省が同方式により続行した大正9年調査も含め、大正10年以降の農商務省の正式調査に引き継がれたものである。

斎藤が調査に没頭した明治中後期といえ、この国に資本主義経済が根を下ろし、それまでの地主・自作・小作といった農村の社会構造が大きく揺らぎはじめた時期である。技術の世界でも、泰西農学がようやく定着し、人工交配育種や化学肥料が普及しはじめている。斎藤の調査は、そうした時代の農村の変遷を農家経済を通じて明らかにした貴重な資料であり、これからも広く利用されていくに違いない。

「斎藤萬吉調査」は全国各地27ヵ村・110余戸の農家を対象に、それぞれ明治23年、32年、41年、44年、大正元年の5回、同じ農家を対象に行われている。農務局の委嘱を受けたようだが、今日のような簿記調査でなく、聞き取り調査（当時は尋問調査といったらしい）で実施された。

ただし、この調査は前述の各年次にいちいち現地を訪れて行ったものではない。よく誤解しているのではと思われる記述をみかけるが^{注6)}、じっさいに調査を開始したのは明治42年（1909）以降であって、「42年以前の調査対象年次である明治23年、32年、41年については、42年の遡及調査によるものであった」⁵⁾という。なるほどいかに斎藤でも、それ以前のドイツ語研修中や農科大学助教授時代に、これほど複雑な調査ができるはずもない。調査年の選定も「明治23年は町村制施行の年であり、かつ農産物の収穫も普通の年柄であったため、同年を『初期』と決め、以降は10年間隔で上記条件に合致した年を求めた」⁶⁾とある。明治23年（1890）は憲法公布・第1回衆議院選挙の年でもある、初期年に決めやすかつただろう。

もちろん遡及調査であっても、体制の整わぬ明治中期のことである。情報の少なかったこの時代に、各地の町村、多数の農家から、詳細な聞き取り調査を行ったことだけでも貴重である。しかも地主・自作・小作、専業・兼業といった階層別に調査し、田畑所有面積、耕作面積、建物の建坪、家族数、雇人数、役畜数。収入支出などと項目も多い。農務局・府県の支援、地元の協力のほか、

同級生や大学の教え子まで頼ったというが、通信・交通ともに不自由な時代のことである。今では「始終脚絆をはいて、下駄ばきで旅行した。田舎の学校、あるいは百姓のところに行って、いろいろ聞く。そうして〈まあ勉強してくれ〉と行って、いつも五十銭玉を置いた」⁷⁾などという興味本位の話しか残っていないが、じっさいには苦労も多かったろう。ついでながら、当時の蕎麦の値段は3～5銭だから、五十銭玉といっても、それほど少ない金額ではなかったことも付記しておきたい。

6. 農家・農村の代弁者として

斎藤にとって、農村行脚は単なる調査の機会ではなく、広範な農家との語らいの場であったのだろう。後年、彼の死後に公にされた古在由直農事試験場長の追悼文によると、斎藤はしばしば講演会に招かれ地方に出かけたが、「講話が済んだからといって、決して直ぐには帰らない。其会の全く終わる迄何日間でも滞在して、地方の人々と膝を交えて懇談し、小さい組合を設け、会を起こすなど、何か具体的に成り立つまで力めたものである」⁸⁾とある。「当時、国会が始まる頃になると、斎藤は農商務省に出かけて、農村・農家の経済事情を話した」⁹⁾という話も伝わっている。地方では農家のよき助言者であり、中央では農家のよき代弁者であったのだろう。

斎藤はこの時期、『実地経済農業指針』（1911）、『農村経営指緘』（1914）、さらに没後の出版ではあるが『農村の開発』（1915）、『日本農家の経済的変遷』（1918）と、著書4冊を発表している。いずれも農村行脚のかたわら執筆したものだが、とくに最後の『日本農業の経済的変遷』には、彼が踏査して得た農家経済調査のデータが多く収録されていて、当時の農村事情を知るには欠かせない書である。斎藤の書はすべてそうだが、惹かれるのは、そこに彼自身の足が集めたナマの農村・農家の姿が透写されているからだろう。

なお、農家と付き合いの多かった斎藤には、技術問題についても質問が多く寄せられていた。とくに多かったのが、肥料と土についての質問である。明治末から大正初年にかけて彼が農村をまわった時代といえ、ちょうど明治農法が定着し、農家に増産意欲が根づきはじめた時期である。多くの農家が施肥に

関心をもったようで、その彼ら質問に答えるのも農村調査の大きな仕事だったのであろう。農家から寄せられた質問に答える回答集が斎藤萬吉・鈴木千代吉合著の『質疑応答肥料要談三百題』である。彼の死後大正4年（1915）に、共著者の鈴木千代吉^{注7)}によって出版された。

おわりに

大正3年（1914）9月2日、斎藤萬吉は52歳の若さで、胃潰瘍のため亡くなった。亡くなったときのくわしい状況は『質疑応答肥料要談三百題』の〈上梓に臨みて〉で、鈴木千代吉が詳述している¹⁰⁾。山陰への調査旅行を終え、自宅でくつろいでいたときの突然の発病というが、長年の過労と好物のお酒が彼の生命を縮めたのだらう。遺骨は前述した故郷福島県二本松市長泉寺の顕彰碑の左手奥、緩やか傾斜の中腹にある斎藤家の墓地に葬られた。葬儀には彼を慕う人が多数参集したのだらう。顕彰碑の例の碑銘には「弔者蓋し七千人なり」とあった。

斎藤ほど農家を愛し、農家に愛された研究者はいない。彼ほど農村に繁く足を運び、農業のナマの姿を知ろうと努めた研究者もそういないだらう。古在は斎藤が農家の友人が多いだけでなく「深く交わった点に於いては、恐らく斎藤君の右に出ずる者はないかと思ふ」¹¹⁾と述べている。彼が亡くなってすでに100年が経つが、残念ながら、交通機関が発達し、情報ネットが張り巡らされた今日にあっても、この言葉はなお生きているのではないだらうか。「農学ハ舌耕ニアラザルナリ」という名言も、斎藤の口から発したものだからこそ重みがある。彼の歩んだ道を辿ってみて、改めてこの言葉の重みを実感した。

注

- 1) 駒場農学校農学科本科2回生 同期生に横井時敬（帝国大学農科大学教授・東京農科大学創立者）、酒匂常明（農商務省農務局長）、大内健（注3参照）、沢野淳（農商務省農事試験場初代場長）が、1回生（3月早く卒業）には福島県農学校で同輩であった牛村七氏、斎藤を農科大学の乙科助教授に招いた玉利喜造（帝国大学農科大学教授）がいた。
- 2) フェスカMax Fesca（1846～1917） 明治15年（1882）に地質調査所土性調査掛兼駒場

農学校農学教師として来日、以後同校の後身東京農林学校、帝国大学農科大学で12年間教鞭をとり、ドイツ農学の合理主義、わけても実験科学的思考をわが国農学に根づかせた。もともと地質学者で、着任後ただちに全国を廻り、明治18年（1885）には『甲斐國土性図』を完成、27年までに全国各地の土性図をつぎつぎに完成している。明治28年（1895）に惜しまれつつ離日した。著書に前記のほか『日本農業及北海道殖民論』、『農業改良按』（1888）、『日本地産論、通編』（1891）『日本地産論、特編（上巻）』（1894）などがある。

- 3) 大内 健 (1864～1894) 齊藤と同じ駒場農学校農学科第2回卒業生。退学処分処に処せられて以後、地質調査所に勤め、フェスカを助けて「甲斐國土性図」の作製に貢献した。明治25年に、東京高等師範学校教授としてドイツ・フランスに留学したが、病を得て帰国、明治27年に30歳で亡くなった。東京大学農学生命科学図書館には、彼が生徒時代に受講した農学講義の自筆ノートが「貴重書」として保存されている。そんな彼が「怠惰・学業不進歩」で退学とは。これも退学か腑に落ちない理由のひとつである。
- 4) ゴルト T. F. von der Goltz (1836～1905) ドイツの農業経営学者・農政学者。ケーニヒスベルク、イエーナ、ボンンの各大学教授、ボン・ポッペルスドルフ農科大学学長を歴任。当時支配的であった生産的見地に変えて、農業の社会経済的側面を強調する経営的見地からの農業経済学発展に貢献した。横井時敬・伊藤清蔵・新渡戸稻造・河上肇など、いずれも彼の門下生になっており、明治草創期のわが国農業経済学の発展に大きな影響を及ぼした。著書に『農業経営学便覧』(1886)、『ドイツ農業史』(2巻, 1902～03) など。
- 5) 農科大学乙科 駒場農学校以来の試業科が「実業者を養成するの必要」（東京帝国大学50年史上1378頁）から再編されたもので、その設立には「地方豪農」の養成を建言していた玉利喜造教授の力が大きかったという。玉利は駒場時代の斎藤の同級生である。斎藤の助教授就任にも玉利の支援があったのではないだろうか。
- 6) たとえば『農業技術研究所80年史』（1974）:376頁には「明治23年から大正9年にわたり、全国41ヵ村について実施された」とある。また『福島県農業史5』（1983）:329頁にも「明治23、32、41、44、大正元年、9年にわたって全国数十ヵ村百数十戸の農家について、原則的には同一農家を継続的に調査記録した」との簡単な記述がある。
- 7) 鈴木千代吉(1878～1972) 栃木県生まれ。明治34年～大正5年の間、農事試験場東奥支場・本場に勤務、ここで農家経済調査に励む斎藤に会った。専門は肥料化学で、鈴木自身も『肥料新説』(1912)、『農家肥培論講話』(1918) など多くの著書をもつ。特筆すべきは、わが国公害研究草分けの書ともいえる『社会問題煙害論』(1914) である。秋田県長木沢の山林が鉱山の煙害によって凋落したことの原因究明に発して、鉱工業の排煙が広く山林や農作物に及ぼす被害について調査、顕微鏡観察から暴露実験、化学分析と当時考えられたあらゆる方法を駆使して調査し「実に国家的社会的な大問題なり」と警告している。

引用文献

- 1) 西山武一 (1976) 「斎藤先生碑銘」読み下し『明治大正農政経済名著集第九巻』月報1976年2月号:7頁、農文協。
- 2) 須々田黎吉 (1975) 「斎藤萬吉の福島時代—「手稿」にちなんで—」『農村研究』41:38～48頁

- 3) 須々田黎吉 (1975) 「斎藤萬吉の思想と学問の形成」『農業經濟累年統計 3 : 農家經濟調査史』: 464頁
- 4) 斎藤萬吉 (1902) 『農政学』1頁、千葉県千葉郡農會 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 5) 前掲 (須々田「福島時代」) 38頁
- 6) 武田 勉 (1975) 「斎藤萬吉の農家經濟調査の成立過程」『農業經濟累年統計 3 : 農家經濟調査史』 483頁
- 7) 安藤廣太郎 (1968) 「斎藤萬吉のこと」『安藤廣太郎回顧録』 19頁、日本農業研究所
- 8) 古在由直 (1915) 「嘻斎藤農学士」斎藤萬吉著『農村の開発 (付録)』269頁、中央報徳会 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 9) 須々田黎吉『明治大正農政經濟名著集第九卷』 解題14頁、農文協
- 10) 鈴木千代吉 (1915) 「上梓に臨みて」斎藤萬吉・鈴木千代吉合著『肥料要談三百題』 3～4頁 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 11) 前掲 (古在) 270頁